

編集後記

雑誌名	能楽研究 : 能楽研究所紀要
巻	16
ページ	246-246
発行年	1990-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020430

〔編集後記〕

今号は、能楽研究所彙報を除く全体を南都両神事能索引にあてるといふ前例のない形を採用した。分載は利用に不便なのでまとめて発表したと考えたからで、そのため文字を7ポ大に縮小するという読者無視に近い方法を採用もした。が、ありていに言えば、発行の遅れを取り戻すために、一冊は従来のような論文主体の形、一冊は今号の形にして、今年度中に二冊発行しようとの意図に出たことだった。だが、論文主体の分は年度内に発行できそうもなく、表紙下部に刷り込む年度の表記を、15号の「1989年度」から一年を飛ばして「1991年度」とすることにした。従来から実際の発行年月とはそこがずれていたのであるが、いつか取り返そうと、ずれたままにしていた。回復の見込みなしと諦めたのである。

近年の能楽の繁盛ぶりはまさに異常で、薪能と呼ばれる催しの盛行がそれを象徴している。乱暴な短縮や省略が平気で行われ、これが能楽ですと言いかねる催しが罷り通っている一事からだけでも、今の能楽ブームの不健全さが明らかであろう。

能楽が繁盛し、関心を抱く人が増えるにつれて、能会の解説、講演会の講師、各種企画への参画、啓蒙書への執筆などの形で、研究者の出番も増加する。社会的活動とやらを研究者の業績評価に加えるべきだといった風潮も、それに拍車をかける。総じて能楽研究者はいま忙し過ぎるのではなからうか。テレビ放送を契機とする太平記ブームで軍記の研究者が多忙を極めている事態は放送終了後に消滅するであろうが、能楽ブームは簡単に

収まりそうもない。研究者のほずが解説者に変貌してしまう危険な状況が、能楽研究者を取り巻き続けるということである。

能楽研究所の所員がいま多忙である主因は『鴻山文庫蔵能楽資料解題(下)』に取り組んでいるからである。今年度中の完成が危ぶまれるこの仕事は確かに難業で、その最中に論文主体の紀要をもう一冊出そうとしたのは欲張りであった。だが、実現しないことはやはり淋しい。解題の仕事に取り組み、限度を弁えた社会的活動を続けながらも、論文はどしどし書く研究意欲を、所員各位に期待したい。創立四十周年を迎える来年度の紀要は、所員全員の論文で埋めたいものである。

(表章)

平成三年十二月二十日 発行

能 楽 研 究 第十六号

102 東京都千代田区富士見二一七一一
〇三三二六四九八一五、三三三四六七七

編集兼 野上 法政大学能楽研究所
発行者 記念

所長 表 章

印刷所 三和印刷株式会社
長野市川中島町一八二二一